博士論文 概要書

ブータンの情報社会

－〈情報生態系〉モデルの構築とその実践的検討－

Information Society in Bhutan

－Theoretical Framework of “Information-oriented Ecosystem” and its Practical Study－

早稲田大学大学院社会科学研究科

政策情報論専攻　政策情報論研究

藤原　整

本論は、ヒマラヤの王国ブータンに着目し、その情報社会像を描き出したものである。

まず、ブータンでは、近代の超越が起きている、という事実がある。ブータンは、二一世紀に入ってから民主主義国家となった。また、資本主義経済のもとでの工業化は、現在に至るまで実現しているとは言い難い。これまで、そのような超越が何をもたらすのか、十分な関心が払われてきたとは言い難い。ブータンのような存在は、グローバル社会には非常に軽微な影響しか与えない特異な事例として等閑視されてきたのではないだろうか。

一方、情報化社会論と呼ばれる、1960 年代に日本で起こった、一種の未来学理論に端を発する理論群がある。問題は、ブータンが、工業社会を経ずに情報化、つまり情報通信技術の普及が進んでいる、という事実である。情報通信技術が社会に何らかのインパクトを与えることは、これまで散々研究されてきたが、それらはすべて、工業化された社会における情報化を取り扱ってきた。

上記の問題意識から、この論文の目的として次の二つを設定した。一つは、「情報化」というグローバルな現象を切り口として、ブータンという地域社会を学際的に論じることであり、もう一つは、ブータンというローカルな地域で起きている現象から、より汎用的な、新しい情報社会を説明することである。

この論文は全部で四部構成となっており、各部につき 2 章ずつ、計 8 章から成る。

第一部では、まず、ブータンという国を概観し、主に歴史的な事実関係の記述を中心にしながら、同国について理解を深めていただくことを前提として、全編への導入を担う。特に、ブータンにおける近代化、そして情報化という過程については、個別に節建て、あるいは章建てして解説を施していく。

まず、第 1 章では、ブータン王国の概説とその地政学的背景から話をはじめる。ブータンの位置、自然環境、文化、産業、そして民族構成など、幅広い分野について紹介し、ここから先の論述を理解する上での足がかりとなるよう構成した。続いて、ブータンの歴史を概観したうえで、その近代化の過程、1960 年代以降、ブータンの経済開発が進み、そして民主化へ向けた道筋がかたちづくられていく、まさにその過程について論じていく。

第 2 章では、ブータンの情報化の歴史的な経過について、近代情報通信技術導入・メディア勃興期と、現代情報通信技術解禁～普及期とに大きく分けて解説する。なお、ここでは、近代情報通信技術とは、電信や電話に代表される電気通信技術、そして、現代情報通信技術とは、インターネットや携帯電話といった技術のことを指すものと便宜的に分類する。

続く第二部では、情報化社会論をはじめとする先行研究のレビューを行った上で、ブータンのような特異な事例をも包含する「情報社会」を見通す新たな視座が必要であることに言及する。そして、その視座の一つの帰結として、情報学的世界観に基づく〈情報生態系〉モデルを提示する。

第 3 章では、情報と社会とをめぐって、特にこの半世紀のあいだ、どのような学術的議論が展開されてきたのかを明らかにしていく。はじめに、1960 年代から 2000 年ごろまでのあいだに展開された、情報化社会論、あるいはポスト工業（化）社会論と呼ばれている一連の理論群について概説する。続いて、そのような未来学的な議論とは一線を画した、社会学と

情報学との接合から生まれてきた社会情報学という学問分野について、その成り立ちからの経過をたどっていく。最後に、二一世紀の情報社会論と題して、社会学と人類学の双方の視点から描かれる、現代社会に関する論考、そのなかでのメディアとの連関などについて概説していく。

第4章では、本論の理論的枠組みが提示される。はじめに、「情報」という概念の定義について再考したのち、H・R・マトゥラーナとF・J・ヴァレラによる「オートポイエーシス理論」、二クラス・ルーマンによる「社会システム理論」を引き継ぐかたちで、西垣通によって提示された「基礎情報学」という理論体系を、本論が依って立つ理論的な枠組みの基礎に位置づける。この基礎情報学にもとづく情報学的世界観から眺めると、社会システムの外側には、〈情報環境〉と呼ぶべき環境がある。そしてそれらは、概念的な意味における技術的情報＝〈技術〉、あるいは場所的情報＝〈場所〉によって満たされている。本論では、社会システムと〈情報環境〉とのインタラクティブな関係性を、生態系という比喩を用いて、〈情報生態系〉という言葉で呼び表すことにする。この〈情報生態系〉モデルは、情報の循環系として想起される。

第三部では、ブータンにおいて実施した、過去7年、計80日間におよぶフィールド調査結果から成っている。本研究にあたっての中心的な視点であり、かつ実地調査のための観察モデルとして導出された〈情報生態系〉という概念を援用しながら、各章において、それぞれに記述を試みていく。

第5章では、まず、現地調査のあいだに見聞した内容、そしてそこから得られた知見にもとづいて、現在に至るまで、ブータン社会はその基底の部分において、自然環境によって大きな制約を受け、また同時に恩恵も受けてきたことを詳しく論述していく。そのうえで、さらに具体的な対象地域として、西部、東部、および南部から各1地域を取り上げ、それぞれの社会システムを取り巻いている〈情報環境〉、技術システムや場所システムと想定されるものを類推し、その内部にある社会システムがどのような情報に触れているのかを明らかにしていく。地域ごとに異なる〈情報環境〉の様相について、現地でのフィールドワーク結果と、各地域の統計資料にもとづいて記述することが試みられていく。

続く第6章では、政治、経済、そして文化、それぞれの側面ごとに特徴的な〈情報現象〉群を事例として取り上げ、筆者自身が体験した現場の空気感も交えながら、その全体像が少しでも伝えられるように可能な限り詳細なフィールドノートを描き出していく。社会システムの内部と推定される地点に足を踏み入れ、そこに内在する心的システムの作動、つまり人々の行為に目を凝らし、耳を傾ける。そこから社会システムの全体像を類推し、その作動を捉えることによって、社会システムと環境の境界を同定していく。

なお、事例としては、「2013年国民議会選挙の展開」、「Thimphu TechParkが目指した情報通信産業振興」、および「2018 FIFAワールドカップ・ロシア大会・アジア予選をめぐって」という3つを選出した。選出理由としては、地域的な事例ではなく、ブータンという国全体に関わるものであること、そして、政治・経済・文化というそれぞれの側面からブータンの実態に迫ることができるものであること、以上の2点を挙げておきたい。

第四部では、本論における結論を提示し、さらなる展開の可能性についても示唆していく。

結論として述べられるのは、ブータンにおいて、それぞれに異なる地域別の〈情報環境〉が構築され、そしてそれぞれに特徴的な社会システムができあがりつつあり、それらが一体となって〈情報生態系〉を成している、という、総括的な議論が中心となる。

第7章では、まず、第6章の〈情報現象〉のケーススタディにもとづいて、政治、経済、そして文化について、それぞれの〈情報生態系〉の有り様を描き出していく。そこでは、ブータンという社会システムが、〈技術〉と〈場所〉から成る〈情報環境〉に対して適応し、また、〈技術〉と〈場所〉が、それぞれ互いに適応しようとしているような所作を見出すことができる。ブータンの、自然環境という強固な基盤によって支えられている〈場所〉は、世界中から絶えず流入してくる新しい〈技術〉を受け止めて、それらを選り分けている。一方で、新しい〈技術〉がもたらされ、それを利用する者たちが、〈場所〉に新たな経験を埋め込んでいくことで、〈場所〉もまた、少しずつ変わっていく。ブータンにおいて、社会と〈技術〉と〈場所〉が相互に関係し合う〈情報生態系〉の現在の姿こそが、ブータンの「情報社会」の現在形そのものの姿である。

最終の第8章では、「進化」にかかわる諸理論との接合を目指すことで、〈情報生態系〉モデルに、もう一歩俯瞰した視座を与える。そして、より広い視野のもとに、それぞれの〈情報生態系〉、言わば新しい「情報社会」の姿が立ち現れていることを以って、本論の結語とする。進化の理論とは、かのチャールズ・ダーウィンによってもたらされた、「自然選択（淘汰）」がもたらす偶然性が、その出発点に位置づけられる。そして、近年では、スチュアート・カウフマンが、「自己組織化」がもたらす複雑性を、そこに加えた。現在では、その論理は、文化や、技術や、社会にも応用し得ると考えられてきている。それは、かつてのような進歩史観にもとづく進化論の適用ではなく、純粋な意味での、進化史観にもとづいている。このような新しい進化の概念は、本論が扱ってきた〈情報生態系〉を、また新たな地平へと導いてくれる。そこでは、社会と〈技術〉と〈場所〉が、単なる相互作用をしているだけではなく、「共進化」と呼ばれる、複雑な進化を遂げようとしている姿が導出されてくる。そして、その進化史観に紐づけられた視座において、再び「情報社会」という問題に向き合うことで、各地に枝分かれして現出している、それぞれの情報社会へと至ることができるのである。

（3,830字）